

和文報告書

1. 課題名／調査地／名前

開発論における「参加」と「リスク」概念の批判的再検討／エチオピア／西真如

2. 研究目的

近年、開発パラダイムは「人間の安全保障」の枠組みのもとで大がかりな転換を遂げたと言われる。開発理論においては、「人間開発指数」に見られるような開発指標の整備や、ミクロ経済学分野における世帯レベルでの脆弱性分析の精緻化が推進されてきた。さらに参加型開発論の展開により、実践のレベルでも住民主導の開発が行われるようになったとされる。しかしながら、普遍的な開発指標のセットを地域社会に適用する試みは、地域の多様性に対する配慮を欠くばかりではなく、開発をめぐる多面的なコミュニケーションの可能性を封じ込める恐れがある。また従来の脆弱性分析は、自らリスクを解釈し、危機に対処しようとする住民の主体性をじゅうぶんに捉えきれない恐れがある。さらに参加型開発論においては、開発の主体となるべき「コミュニティ」の解釈について、説得力のある議論がなされてきたとは言いがたい。

本研究では、エチオピアの地域住民による HIV/AIDS 問題への取り組みの事例を考察する。地域住民の間にさまざまな価値観や利害の対立があることを前提としながら、住民が自ら感染症のリスクを解釈し、問題に取り組んでいることを示したい。またこの考察を通して、従来の「参加」および「リスク」概念を批判的に再検討し、地域社会の持続性を確保するための、ローカルな公共性構築のプロセスを明らかにしたい。

3. 研究の内容と成果（得られた知見の概要）

エチオピアのグラゲ県において、住民の多くはエンセーテの栽培を中心とした農耕を営んでいる。しかし同県では、農地の細分化が進んでいる上、コーヒーのような換金作物の栽培も、あまり盛んではないため、農業だけでは十分な家計収入を得ること難しい。そこで彼らの中には、国内各地の都市に移住して商業を営む人たちが少なくない。特にグラゲ県の若い男性にとっては、10代のうちに都市に移住し、生活の基盤を築いた上で、農村の女性と結婚することが典型的なライフコースとなっている。グラゲ県住民が直面している問題は、農業とともに彼らの生計の根幹をなす移動労働（および移動を前提としたライフコース）が、同時に HIV 感染の経路を提供していることである。同県では近年、住民が中心となって HIV/AIDS への取り組みが展開されている。

調査者は 2007 年 9 月と 2008 年 2 月に現地調査を実施し、県内の感染者団体、地域社会の伝統的リーダー（長老）、県保健局、同県から都市に移住した人たちで組織する同郷会等から聞き取り調査をおこなった。その結果、次のようなことが明らかになった。同県では、長老の指導により結婚前検査を柱とする HIV 予防運動が展開されている。これは主に農村の若い女性を感染から守る目的があるが、既婚女性の中には、結婚前検査の有効性に疑問を持つ者も少なくない。そこで長老たちは、結婚のあとも必要に応じて検査を義務づける

提案をおこなっている。しかし既婚男性の側からは、結婚後検査はあまり実効的ではないという意見が聞かれる。また同県の長老は、上記の予防運動に加えて、「隣家の庭畑を耕す」運動（HIV/AIDS のために働き手を確保できない農家世帯のために、近隣世帯が労働力を提供しようという運動）も展開しており、この運動をめぐっても、住民の間でさまざまな意見が交わされていることがわかった。

4. 成果発表の具体的な予定（投稿予定の学術雑誌の書名等）

GCOE ワーキングペーパーとして公開予定



写真1. グラゲ県の農村風景



写真2. 「エイズについて親子で話し合おう！」（政府が設置した街頭看板）